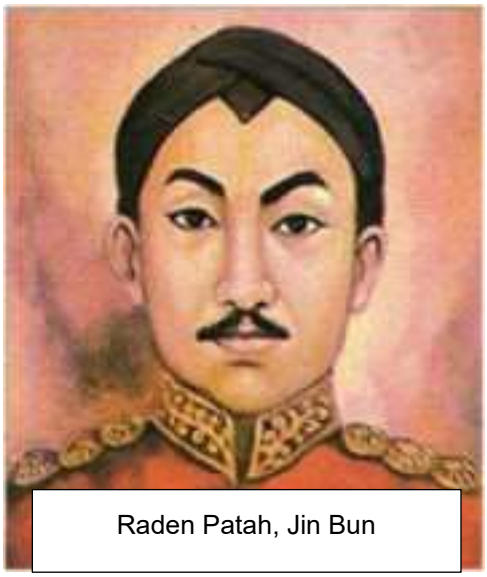
第七章　Demak イスラム国の建国

ヒンドゥー王国の衰退とイスラム王国の勃興

第七章　Demak イスラム国の建国

第一節　　Masjid Syhukur

〈193〉 Jin Bun がマジャパヒト・ジャワ・ヒンドゥー国を滅ぼした後、直ちに彼は 1475 年に既に開始していた Demak イスラム国の建国を完成させようとした。かれはマジャパヒト王を継承することはせず、イスラム国の都をつくりだそうとした。マジャパヒトの都はそのまま放置しておいた。かれは Demak を都とした Demak でのイスラム国の建国に注意を集中していた。


Raden Patah, Jin Bun

1474 年に Jin Bun が Kin San と Palembang からマジャパヒトに行く途中で、鄭和提督が計画し実行した外交通商事業の拡大の時期にスマランの華人ムスリムが建てたモスクに立ち寄った。1413 年、鄭和提督は、スマランの造船所で行った船の修理を待っていた間にこのモスクに立ち寄ったことがあった。しかし、Jin Bun がこのモスクに立ち寄った時、この状態は変わっていた。スマランモスクは既に三保洞廟になっていたのであった。Jin Bun は、将来中華廟に絶対に変わらないモスクを建てられるようにと神に祈った。〈194〉彼が輝かしい勝利と共にマジャパヒトから戻ってきた後に、彼はこの約束を思い出した。約束の完成と感謝の意として Jin Bun は直ちにスマランモスクを建設するように命じた。この命令は 1478 年に実施された、このように、実際には現在でも立っているスマランモスクは Jin Bun にジャワ・ヒンドゥーのマジャパヒト王国を崩壊させる機会を与えてくれた神へ感謝した印のモスクなのである。スマランモスクは感謝のモスクであり栄光のモスクでもある。信仰熱心な一人のイスラム信者として、Jin Bun は神への感謝を表すためにこのモスクを建てたのであった。このモスクの建設は彼の信仰生活と合致していたのであった。

既に三保洞廟に変わってしまった元のモスクは、その数が多い非ムスリム華人たち

の祈祷のためにそのままにされた。Jin Bun も新しいイスラム国家の建設に彼らの力が必要であった。彼は三保洞廟をモスクに改変するために権力を使いたくなかったのであった。このような態度は頭のよいやりかたでよく理解できる。この態度によって、Jin Bun は非イスラム華人グループからの同情を得たのであった。

Demak のサルタンになった後、Jin Bun は Al-Fatah の名を採用した。Babad Tanah Jawi と Serat Kanda の中では彼は Raden Patah として知られている。Demak はジャワでは最初の、現在のインドネシアでは三番目、東南アジアでは四番目のイスラム国家である。その都は Demak であった。その港はスマラン。このようにこの港市は政治の中心地から離されたのであった。

第二節　スマランの町の建設

スマランは Demak の都の入り口の港市になった。Demak イスラム国にとってスマランは重要な都市になった。<195>それ故、直ちに Jin Bun 将軍の注意を引いた。マジャパヒトの都で三年間にわたりスパイ活動をした Kin San は Jin Bun とともに 1478 年にマジャパヒトを後にした。彼は Jin Bun が信用を置いた人であった。このような経緯で、Kin San 別名 Raden Kusen はスマランの町の支配を任された。しかしながら彼にはスマランの町を港市として建設するという重要な仕事があった。この仕事を実行するに当たり、スマランの華人たちの労働力を動かすことに賛成する援助者の力を Kin San は必要とした。Kin San は直ちに Gan Si Cang をスマランの華人惣代に昇格させた。Gan Si Cang はムスリムではなかったものの故 Gan Eng Cu 別名 Tuban の Arya Teja の息子であった。このようにしてイスラムのみならず道教のグループも政府内に適当な地位を得ることになった。イスラムグループの長は Kin San で道教グループの長は Gan Si Cang であった。

Gan Si Cang, Sunan Kalijaga, Raden Said

スマランの華人の大部分はムスリムでなかったため、Kin San が Gan Si Cang をスマランの華人惣代にあてたことは極めて賢明な策であった。彼らは専門分野での熟練した職人たちであった。船大工が造船のために重要であった。港市としてスマランは

多数の木造船を必要とした。Gan Si Cang は造船の分野で華人船大工を動かすのに最適の人物であった。Kin San と Gan Si Cang はスマランで製材所を再開し、長いこと放置されてきたドックを完成させたのであった。

スマランの町はジャワ海と東インドネシア海域での交易ルートを支配する港市になる準備をしていた。マジャパヒト時代にはジャワ商人たちの専売であった香料交易をスマランの華人商人たちの手に渡す必要があった。スマランからの商船は香料を Maluku 諸島で買い取ってマラッカで売るために単独で航海しなければならなかった。〈196〉この交易から得られた大きな利益はスマランの町と Demak の都の建設に利用することができたのであった。

このような経緯で、スマランが Demak イスラム国の港市として開発されて以来、大部分が華人支配下のスマランに Tuban の機能は移った。スマランの造船所での船の建造とジャワ海での交易の大部分は華人によって行われるようになった。確かに事実上、Daja/Pasai がインド・イスラム国であったように Demak は華人イスラム国家であった。Jin Bun は華人イスラム社会で育った中国とジャワの混血であった。これ自体で、彼は、いずれにせよヒンドゥー教を奉じる元マジャパヒトの人たちであったジャワ人のグループより華人グループの方に近かったのである。マジャパヒトの人たちは Jin Bun の同調者であるDemakの人たちにまだ疑われていた。この理由のみで彼らは活動する機会を多く得ることができなかった。Demak イスラム国の登場に伴い、華人たちはジャワ海の交易ルートをすべて手中にしたのであった。彼らはマラッカ港市のみならず Maluku 諸島においてもマジャパヒト商人にとって代わったのであった。

Demak イスラム国は海に面していた。その後側は豊かな水と深いチークの森で囲まれていた。このような地点は大航海時代の国家の形成に大変多くの利点があった。インドネシア海域を完全に支配し、イスラム国の市場で極めて評判の高い産品の交易を支配する大航海時代の国家であるが故に、短時間の間にマラッカ・サルタン国の競争相手となりえたのであった。スマランは中国とインドの間の航路から離れていたのにもかかわらず、Maluku 産香料の取引はスマラン港が完全に取り仕切っていたので、香料を購入するためにスマランに直接やってくる中国船も多かった。このようにスマラン港市は諸外国からの商船の来航が日増しに増加した。〈197〉交易と海域の支配から得られる十分な利益はDemak艦隊の増設と港市の改善に利用された。スマ

ラン港市はマラッカ港市の競争相手として芽吹いたのであった。

1509 年に Jin Bun の長男の Yat Sun 別名 Adipati Unus/Yunus は船舶の建造量を増やすために Kin San に支援を求めた。Yat Sun はマラッカを攻撃する夢を抱いていたからであった。このようにしてマラッカ海峡の海上交易ルートを支配するという Demak 人の理想が湧いて出たのであった。

第三節　Demak モスクの完成

イスラム国の首都としての Demak は美しくある必要があった。Jin Bun が Demak に住んで Bintara の森を開墾した時からその建設が始められた Demak のモスクの完成に Jin Bun の目は向けられた。マジャパヒトを倒す前の Demak のモスクは大層質素で他の華人モスクと変わりがなかったことは明らかである。Demak が新国家の首都になり、当然のこととして礼拝所の建設予算が確かに組まれていたので、このモスクの建物を拡大しより美しくしたのであった。

マジャパヒトの征服の三年後に、スマランの華人惣代 Gan Si Cang は Kin San 太守に宛てて Demak の大モスクの建設事業の完成に協力したいという申請を出した。スマランのドックの華人船大工たちは、大モスクの工事完成に自発的にあるいは奉仕活動として手伝いたいという意図を持っていた。この依頼は Jin Bun に受諾された。Jin Bun は、彼らがムスリムでなくても造船所の職人たちの奉仕活動を受け入れることに負担を感じなかった。このように、Demak の大モスクの建設はスマランのドックの船大工たちによって行われた。〈198〉彼らは確かに木造構造物に熟練していた。Demak 大モスクはすべてが木造である。その大黒柱は、海上の強風に耐えなくてはならない帆柱の構造に従ってきれいにきちんと積層された木片で作られている。この大黒柱は Saka Tal『木くずの柱』と呼ばれている。実際には木くずではなく、帆柱の構造様式に従ってきちんと組み合わされた木片からこの柱は構成されている。Babad Tanah Jawi と Serat Kanda では sala tal は Sunan Kalijaga が作ったものと述べている。このことをもとにすると、Sunan Kalijaga とは 1478 年当時スマランの華人惣代であった Gan Si Cang であると比定できると思われる。彼の監視の下で、この柱はスマランの造船所の船大工によって作られたのである。この Sunan Kalijaga はスマラン地域の

Kadilangu に埋葬された。Kadilangu が Sunan Kalijaga の墓所として示されていることは Sunan Kalijaga がスマランの華人惣代で Gan Eng Cu 別名 Tuban 太守の Arya Teja の息子である Gan Si Cang に一致すると思われる。いずれにせよ、Gan Si Cang は Bong Swi Hoo 別名 Sunan Ngampel の妻の Nyi Gede Manila の兄弟である。Sunan Kalijaga は Sunan Ngampel の義理の兄弟と言われ、若い時には Raden Said という名であった。

第四節　マジャパヒトの都の運命

1478 年の Demak 軍のマジャパヒトの都に対する攻撃ではこの都は何の損傷も受けなかったことは前に触れた。マジャパヒト王国の中心はいまだ健在で Demak 軍の焦土作戦の対象にはならなかった。Kertabhumi 王が Jin Bun に捕まって Demak に送られた後、マジャパヒトは Demak の属国に組み入れられた。マジャパヒト太守として任官したのは Kertabhumi 王の娘婿である Girindrawardhana であった。その名は Jiyu/Dukuhan Duku 碑文 O.J.O. VCII-XCV に記されている。スマランの三保洞廟資料ではこのマジャパヒト王を Pa Bu Ta La と呼び 1488 年に統治していたとある。一方 Jiyu 碑文では Dyah Ranawijaya Girindrawardhana はサカ歴 1408 年、西暦 1486 年に統治していたとある。〈199〉この Pa Bu Ta La は Girindrawardhana と確定することができる。マジャパヒトはいまだに存続し続けてはいるが Demak の属国として Demak イスラム国に税金を納めなくてはならなかった。

Jin Bun は、Demak イスラム国の建設に参加させるためにマジャパヒト国民の生活の方向を変えるのが遅すぎた。乱れたその生活を彼は放置していた。彼はジャワ・ヒンドゥーを奉じるマジャパヒトの人たちの同情を得るのが上手ではなかった。それどころか彼はその人たちを疑っていた。Jin Bun はジャワ海沿岸諸都市のイスラムと非イスラム華人社会にその強さを依存しすぎていた。彼は元マジャパヒト国民の農民が国家の建設と防衛のために大変有用な力となりうることを忘れていたのであった。

本来なら Jin Bun の考え方はよく理解できる。Jin Bun が大変賢明で勇気がある若者であることは確かで、それゆえ 184 年間も続き、栄光の時代を経験し列島すべてから尊敬されたマジャパヒト王国を崩壊させるほどの軍事力を三年間で作り上げたこと

Bong Swi Hoo,Sunan Ngampel, Raden Rahmat

は否定できない事実である。常に Jin Bun の教師であり忠告者でもあった Bong Swi Hoo 別名 Sunan Ngampel が亡くなって、Jin Bun はすべての権力を掌握した。Bong Swi Hoo の死で、彼は経験ある忠告者と教師を失った。Bong Swi Hoo に代わる人はいなかった。Bong Swi Hoo の忠告のみでマジャパヒト王国を滅ぼす準備が短期間のうちに出来上がったのであった。Jin Bun は Swan Liong の庇護の下の Palembang の華人イスラム社会で大きくなった。ジャワにおいては、彼は Ngampel の Bong Swi Hoo に直ちに師事する来訪者となった。彼はそこの華人イスラム社会でも生きた。その後かれは Bintara に居住した。そこで、森の開拓で彼は忙しかった。このように、彼は華人イスラム社会しか知らなかったのであった。ジャワ・ヒンドゥー社会を知るための機会はなく、一方、元マジャパヒトの国民の大部分はヒンドゥー教徒のジャワ人であった。〈200〉これ自体から、Jin Bun の視野は極めて狭く、ムスリムと非ムスリム華人社会に限られていただけであったことがわかる。いずれにせよ、ジャワ人間の大部分はマジャパヒトの元国民であった。常に崇められてきたマジャパヒト王国が Jin Bun によって突然滅ぼされたことを彼らがうれしく感じていないことは明らかであった。Jin Bun に対するジャワ人のなかで反感が存在したことは否定できないのである。それ自体、その反対も正しく、Jin Bun 側もマジャパヒトの元国民たちに疑いを向けていたのであった。このような態度が現支配者の Jin Bun 側と被支配者のマジャパヒトの元国民との間の関係を遠ざけることになった。その影響とは Demak にその都をおいた Jin Bun の政府が自分自身を囲い込んだことであった。彼は大航海時代の国家を建設することに心血を注いでいた。彼の注意は内陸部の農民大衆の平和と繁栄を高める努力には注がれなかったのであった。内陸部の大衆は頼るものもなく中央政府からの直接統治もなかったのであった。

宗教の違い、民族の違い、中央政府と内陸地方の敵対姿勢が国内で対立の種を作った。内陸部の人たちは Demak 国建国の経緯を知らなかったので内陸部の人たち周辺では Demak イスラム国はあまり知られていなかった。彼らが知っていたのは、崇められていたマジャパヒト王国が倒れて華人ムスリムに率いられた Demak イスラム国が誕生したことだけであった。中央政府と内陸部の人たちとの関係は遠すぎた。中

央政府は内陸部の人たちのことを気にかけてはいなかった。気にかけていたのは港市の華人社会だけであった。商売の手段を欲しがったジャワ商人たちはヒンドゥー教を離れてイスラムに転向した。農業で生計を立てていた内陸部の人たちの大部分は古い宗教儀式をそのまま行っていた。Demak イスラム国の支配を認めた何人かの地方の首長だけが時々サルタン Al-Fatah 別名 Jin Bun への謁見に訪れるだけであった。〈201〉

マジャパヒト王国の崩壊と内陸部住民の経済の衰退に関連して、マジャパヒト時代にジャワ・ヒンドゥー社会での生活の中心になっていた宗教儀式を簡略化する必要が出てきた。明らかなのは新しい祠堂の建設が中止されたことである。祠堂の建設計画があったとしても国民の能力に応じて簡素な方法で続けられた。王族と国家、国民の安全を願って王族によって大規模に行われた国家的祝宴は既に中止されていた。高額の費用が掛かる国家的祝宴に参加するために、人々がぞろぞろと集まってくることはなくなった。国家的祝宴と村落における祝宴がなくなったことにより、僧侶たちの居場所も徐々になくなってしまった。依然残っていたのは家族の祝宴で、それは家族の成員たちの安全のため各々の住民の屋敷に建てられた祈祷所で行われるものであった。この風習は事実上、古代の祖先の霊に対する祈りの風習の続きであった。田舎の人たちは祠堂守たちの援助を必要としていたので、祠堂のみならず屋敷の祈祷所で行われる祝宴を進めるうえでの忠告者として行動していた祠堂守たちはそのまま存続していた。イスラムの影響が徐々に海岸から村落に入ってきたとき、先祖の霊への祈りの儀式を行ううえで田舎の住民を補助する仕事としての祈祷師(dukun)として彼らはその地位を得たのであった。

イスラムの影響が元マジャパヒト王国の地域で社会的生活に少しずつ入り込んでいった。王に対する神格化はますます薄くなり、いつの間にか消滅した。王は神の化身であることを人はもう信じなくなった。このことでヒンドゥー教の神々に対する祈りは全く消滅したのではないがそれとともに減少した。王は神の化身であるとはイスラムは教えなかった。〈202〉実際上ジャワ・ヒンドゥー王国は既に終焉を迎え、崩御した王のために新しい墓廟を建てることがもうなくなってしまった。このことから、崩御した王の永久化のために彫った神々の石像を作ることももうなくなってしまった。これは建築美術家と彫刻芸術家が彼らの生活の収入の道を失ったことを意味する。彼らは自分

を売り込む市場を失ったのであった。彫刻と建築美術は衰退した。彫刻家と建築芸術家をすぐに殺したのは生きている人の像を作ってはならないというイスラムの禁止事項であった。マジャパヒト時代に育成され祠堂の壁の美しい彫刻を残した彫刻芸術は急に停止したのであった。人の形は植物の葉に代えられた。彫刻芸術は装飾美術だけに限られてしまった。

イスラムの影響による社会生活における大きな変化とはカースト制度の廃止であった。イスラム社会においてカースト制度は存在しない。人類すべては同じ階級である。イスラムは社会階層に対して民主的な面を有している。存在するのは社会的地位による階級、と仕事によって得た富である。カースト制度の存在は否定できないが、一般的にインドネシア特にジャワではインドほどカースト制度の運用が厳格ではなかった。バラモン(Bhrahmana)階級の有する特権、シュードラ(Sudra)階級が担う義務、支配者階級の少数グループに握られた権力、すなわちバラモン、クシャトリア(Kesatria)、ヴァイシャ(Waisya)はイスラム側からの抵抗を受けた。このカースト制度における特権と義務の消滅は社会生活における大きな変革となった。

内陸部における社会生活の方向を Jin Bun がイスラム社会の手順書に従って変えなかったが故に、内陸部の社会生活はだらだらと続いた。揺らぎ始めたヒンドゥー教の教えと芽生えたばかりのイスラムの教えの接触が起きた。この二つの教えの接触はジャワ・イスラム(Islam Kejawen)の理解を生み出した。<203>先祖から受け継いできたヒンドゥーの教えの土台にイスラムの教えを上塗りしたのであった。

Demak の中央政府と内陸部の住民たちとの連絡が良くなかったゆえに、両者とも損失を被った。Demak イスラム国の建設に内陸部の国民の支持を得られなかったことである。政治力は第一に、その数は少なかったが、華人グループと、中央政府付近のいくつか地域のイスラムに転向した人たちを基本とした。その反対に、内陸部の国民たちの生活は中央政府からの監視がなかったので時間がたつにつれ経済的にますます困難になった。中央政府のみならず内陸部の国民たちの経済も全て弱体化した。後退を示す一つの前兆であった。

Demak の属国としてマジャパヒトは 49 年間生き延びた。Girindrawardhana がポルトガル人たちと交渉を行ったことを間違いとして、1527 年になって初めてマジャパヒトの

都が Toh A bo 別名 Sunan Gunungjati が率いる Demak 軍による焦土作戦に遭った。この王はこの年に崩御した一方、王子たちはイスラムに改宗することを拒んで Pasuruan と Penarukan に避難した

第五節　　ポルトガル人たちの航海

ポルトガル人の東方諸国への航海の目的は端的に言うと、経験を得て、収入を探し、宗教を広めることであった。15 世紀末はヨーロッパ人の冒険の時代であった。羅針盤や望遠鏡、艤装などの船の装備の分野での新発明がヨーロッパの船乗りたちの冒険的な航海を後押したのであった。さらに、ヨーロッパ大陸での諸新国家の成立が国家精神の芽吹きを促進させた。闘争の欲求は燃え盛っていた。さらに追加するとその当時、ヨーロッパ諸民族の中の大部分はキリスト教という悪魔に取りつかれていた。イスラム教を信じるすべての民族は敵であり殲滅すべき相手であると考えられていた。〈204〉民族の間でキリスト教をひろめる情熱はまだキリスト教徒の義務であるとする見方はまだ外部には知られていなかった。ローマ法王の提案に従って東方の大陸でイスラム国を屈服させることはが興奮剤になっていた。十字軍戦争の時代は過ぎ去ってしまいキリスト教の地域を拡大する時代に至った。極東の国で産出される諸香料は色々な商人の手を経てヨーロッパでは極めて高価で取引されていた。ヨーロッパの商人たちはこの香料がどこの産品であるか、またこの香料産出国を訪ねるための航路をどうやって発見するかを知りたがっていた。この香料産出国へのルートが開拓された暁には、商人たちは他の商人の手を経ずに産出国において自分自身で買い付けることができるからであった。得られる利潤は大変なものであった。この理想こそ 15 世紀末のヨーロッパの商人と船乗りたちの頭で温めていたものなのであった。

1488 年にアフリカ大陸南端の喜望峰への航路が大航海者という呼び名を得たヘンドリック・ファン・デル・デッケン（Hendrik van der Decken）によって開拓された。この喜望峰の発見はアフリカ東海岸沿いを通って東側の諸国への航路の存在の可能性を開いたものであった。1497 年にポルトガル国王ドン・マニュエル(Dom Manuel or Manuel I)はヴァスコ・ダ・ガマ[1]指揮下で東方諸国への航海を行うための準備ができ

[1] Vasco da Gama

Vasco da Gama

た四隻の船を派遣した。喜望峰を回った後、ヴァスコ・ダ・ガマはアフリカ東海岸沿いを航海し、アラブ人たちの地域に入った。モザンビークとモンバサ(Mobassa)はヴァスコ・ダ・ガマの船団を拒否しようとしたので、航海が敵の地域に入ったと感じられたのであった。水と食料の補給のためにヴァスコ・ダ・ガマはやむを得ず砲撃を行った。ヴァスコ・ダ・ガマの航海に対する東アフリカの人たちの反応は喜ばしいものではないという証拠であった。このポルトガルの船団の来航は彼らに対する敵対行為と取られたのであった。〈205〉

1498 年 5 月にポルトガルの船団はインド西海岸のカリカット[2]に停泊した。ヴァスコ・ダ・ガマはインドの王 Zamorin に謁見する意図を持っていた。ヴァスコ・ダ・ガマは Zamorin 王と通商友好条約を締結しようとしたが失敗に終わった。すでに長いことカリカットの通商ルートを支配してきたアラブ商人の側から Zamorin はそのずっと前から影響を受けていたのであった。商品の大口商売は行えなかった。彼はカリカットからいくつかの商品サンプルを得ただけであった。このような経緯であっても、ヴァスコ・ダ・ガマはリスボンからインドに至る航路を発見したことで満足した。商売は二の次であった。商品サンプルは持ち帰られてリスボンで極めて高価で取引された。

インドへの航海の報告はポルトガル王の耳に届いた。カリカットへ商船を毎年派遣することが決定された。二回目の航海は、キリスト教徒のヴァスコ・ダ・ガマがやろうとした、Zamorin 王との独占通商契約を締結する特命を受けたペドロ・アルヴァレス・カブラル[3]が率いたのであった。これはカリカット港におけるアラブ人の交易を停止させなければならないという意味であった。独占通商条約の締結は失敗に終わった。カブラルはカリカット港での商品交易に失敗したのであった。ポルトガル人たちの来訪に反対するアラブ商人たちとのカリカット港でのポルトガル人たちとアラブ人たちの争いは物理的衝突を生み出した。ポルトガルの船団はさらにコーチ[4]を目指して航海し

[2] (訳) 英語 Calicut
[3] (訳) Pedro Álvares Cabral
[4] (訳) 原文では Kochin。現 Kochi。インド南部のケーララ州の都市

た。カブラルはそこでヨーロッパにすぐに持ち帰る商品の大量購入に成功した。この商品を販売した利益は往復の航海中の費用を賄うことができなかった。リスボンから出向した 13 隻の船の内、帰港したのはたった七隻であった。

四回目の航海は、アラブ人たちとの通商関係を終わらせるように Zamorin 王に圧力をかけるという特命をもってヴァスコ・ダ・ガマが艦隊を再度率いた。この使命は完遂できなかったので、ヴァスコ・ダ・ガマはカリカットと敵対関係にあるコーチとカンヌール[5]を目指して航海を続けた。これらの町からポルトガル船団の来訪は歓迎されたのであった。コーチ王とヴァスコ・ダ・ガマとの間で黒胡椒の定額販売とポルトガル人たちがコーチに倉庫を建てる許可を記した通商友好条約が締結された。ヴァスコ・ダ・ガマにとっての一つの勝利であった。一筆の土地が公式に認定されそこを武力で守らなくてはならなかった。

Francisco de Almeida

この事件は商売仇を喜ばせなかった。損をしたと感じたアラブ商人たちはポルトガル商人たちを連続して排斥しようとした。アラブ商人たちの奏上で、カリカットの Zamorin 王は 1503 年にコーチ港を奪った。商用で来訪したポルトガル人たちはカリカットとコーチの争いに自分自身を巻き込んでしまった。彼らはコーチ側に味方し、カリカットの軍を退けることに成功した。その褒美として彼らはコーチに砦を建てコーチでの独占交易の許可を得たのであった。ポルトガル商人たちにとってさらなる一歩の前進であった。

フランシスコ・デ・アルメイダ[6]に率いられた代理店が 1504 年にインドに開設された。フランシスコ・デ・アルメイダはスリランカへの商船を統制をとって案内することと、軍隊が十分に強力になったらマラッカへ艦隊を送る使命を帯びていた。しかしながら、敵側からの攻撃はますます激しくなった。インド沿岸でのポルトガルの勢力を衰えさせるためのグジャラートとカリカット、エジプトの連合軍は 1509 年にインド西海岸の Diu の近くで敗退した。ポルト

[5] (訳) 原文では Kananore。現 Kannur。南インドのケーララ州の都市。英領時代には Cannanore と呼ばれた。
[6] (訳) 原文では Fransisco d' Almeida。一般的には Francisco de Almeida

ガル人の存在はますます強くなったのであった。

基本的に、イスラム勢力に対する開戦はポルトガル人によって敢行された。その目的は単に利益追求のための商売だけではなく勢力拡大と宗教的拡大であった。

Afonso de Albuquerque

〈207〉彼らに対する最初の敵はイスラム諸国であった。代理店の主がデ・アルメイダからアフォンソ・デ・アルブケルケ[7]の手に 1509 年に移って以来、戦略が変わった。この新しい指導者はとても野心的であった。ポルトガル軍は攻撃を防ぐだけでなく攻撃しなくてはならなくなった。ゴアは総司令部になった。この総司令部からポルトガル軍は整然とその敵を攻撃したのであった。ゴアは 1510 年にポルトガルの手中に落ちたのだった。

軍隊の維持には高額の費用が掛かった。それを賄うために交易が財源になった。デ・アルブケルケは交易をしながらも戦略を推し進めた。必要に応じてイスラム商船に強盗を働いた。商品の流通は支配下にある諸港湾を通じて行った。デ・アルブケルケはきわめて利潤の高い香料交易の源泉の探索と支配を打ち立てたのであった。東方の国で香料を輸出する主要港がマラッカであることを知っていた。ヨーロッパで販売されている東方の国のすべての商品はマラッカ港から運び出されていた。それゆえに、デ・アルブケルケはマラッカ港を支配することを熱望していたのであった。

Diogo Lopes de Sequeira

マラッカ港をスパイするために、デ・アルブケルケはディオゴ・ロペス・デ・スクエイラ[8]を 1509 年に通商関係を探すためという仮面をかぶせてマラッカに派遣した。デ・スクエイラの部下たちは上陸した。この白人の来訪は深く疑われた。彼らは逮捕された。そのうち何人かは殺された。その頭のルイ・デ・アラウジョ(Ruy d'Araujo)は捕虜になった。たぶんこれこそが思う壺であったのであろう。マラッカ王はポルトガル人に引っかかったのであった。デ・スクエイラは直ちに帰還しデ・アルブケルケにこの事件を報告した。マラッカ港を攻撃するのに十分な理由

7 (訳) 原文では Alfonso de Albuquerque。一般的には Afonso de Albuquerque
8 (訳) 原文では Don Lion Lopez da Squeira。一般的には Diogo Lopes de Sequeira。

ができたのであった。〈208〉

ゴアの総司令部の軍事力は十分に強力であった。十七隻の艦船からなるポルトガルの艦隊がマラッカに向けて東に派遣された。1511 年 7 月に艦隊を率いるデ・アルブケルケの船がマラッカ港に停泊した。デ・アルブケルケは 1509 年以来捕らわれているポルトガル人の解放とマラッカに砦を建設する許可を強要した。この要求はサルタン Mahmud に顧みられることがなかった。攻撃すると脅されたが、マラッカのサルタンはその要求を拒否したのだった。マラッカ港市を突然攻撃するという捕虜のデ・アラウジョの提案を密使を通じて受け取っていたデ・アルブケルケはさらに長考することはなかった。停泊していたグジャラートの商船は火をかけられた。彼はグジャラートの商人たちがマラッカのサルタンと共に陰謀を図っていると非難した。彼らはムスリムであるから撲滅すべきグループに含まれたのであった。このグジャラート商人たちから、マラッカのサルタンはイスラムグループに対するインドでのポルトガル人が行ったすべての野蛮な行為を聞いていたのであった。この報告がデ・アルブケルケの要求に対するサルタンの決定に影響したのであった。

第六節　マラッカイスラム国の衰退

デ・アルブケルケがマラッカに停泊した時、マラッカの輝きは陰り始めていた。その当時マラッカは、Keling/Tamil 人のグループ出身の Tun Ali の息子である Tun Mutahir に指名されたサルタン Mahmud Syah に統治されていた。総理大臣の地位にいた Tun Mutahir はマレー人グループから嫌われていた。基本的に他のグループは Tun Perak の子孫が総理大臣になることを望んでいた。Tun Perak はマラッカの有力者でマラッカを栄光の座に引き上げた人であった。Tun Mutahir に対する濡れ衣の噂が Tun Perak 側から流され、サルタン Mahmud Syah は最終的に彼の総理大臣を憎むようになった。Tun Mutahir が総理大臣として在任している間、サルタン Mahmud は自由に動けなかったゆえに、このサルタン Mahmud の態度は理解できるのである。Tun Mutahir にとって、サルタン Mahmud は実際に意のままに動かせる木偶でしかなかったのであった。〈209〉1509 年にデ・スクエイラ指揮下のポルトガル船がマラッカに停泊した時、サルタン Mahmud は Tun Mutahir 総理大臣を排除する好機を得たので

あった。総理大臣が不信行為を働きポルトガル人たちと関係を構築したと追求され、Tun Mutahir は正式な手続きなしで死刑に処せられた。その後任として昇格したのは Tun Perak の息子の Paduka Raja であった。このような背景で、デ・アルブケルケが 1511 年にマラッカを訪れた時、マラッカの支配は新総理大臣の Paduka Raja に掌握されていた。Paduka Raja は Tun Perak の息子ではあったが、Paduka Raja はマラッカ国に大きく貢献した Tun Perak ではなかった。Paduka Raja は亡父と釣り合いが取れなかった。Paduka Raja は外圧による危険に対抗できる人ではなかった。強者 Tun Perak は既に亡くなっていた。Tun Perak の死去と共にマラッカの輝きは消えて行ったのであった。

マラッカは国際港湾都市として繁栄していた。マラッカの町に代理店を置く外国の大商人たちの多くは商売のためにマラッカに居住していた。彼らはマラッカの国民ではなく、外国人のままであった。マラッカでは利益を探していた。マラッカ港市を満たしたインドと中国、ジャワの三方向からの外国商人はマラッカの国内問題には手を出さなかった。マラッカの人たちとポルトガルの人たちとの間の問題で、彼らは自分たちの身と財産の安全を考えて中立な立場をとる方がよかった。このような姿勢であった外国人は確かにこの問題に抗議できる立場ではなかったのであった。マラッカの利害関係を守ることを彼らに強制する要素はなかった。マラッカでの関係は商業関係であった。その当時、マラッカ港に商品を輸入する外国商人が払わなくてはならない税金は既に高額になっていた。外国商人の中の多くは他の場所での新規市場とほかの港市を探すことを考えるようになっていた。<210>「座り商売」をしていただけのマラッカの人は、貨物の積み下ろしに苦労し、危険がいっぱいの海を渡り、遠方からやってきた外国商人より大きな、大変大きな利益を得ていたのであった。マラッカ港で彼はその利潤に合致しない極めて高額の税金を徴収されていた。このような課税政策が商人たちに警戒感を芽生えさせたのであった。

前にちょっと述べたように、マラッカはグループ間での敵対行為の巣になってしまった。サルタンや総理大臣の交替のつど、毎回グループ間抗争が発生した。各グループが自分の属するグループが候補を出し、受け入れられるように圧力をかけた。その支援者は互いに争った。物理的衝突は避けられなかった。心に秘めた憎悪は敵対行為として孵化したのだった。グループ間の抗争は確実に政治を弱体化させた。

国家は粉々に分裂し、その敵を殲滅するための運動を支持しなければならないグループを構成した。この事件はマラッカ港に短期間滞在した各人にも目撃されたのであった。この分裂した力を再度結集するためには強い人が必要であった。その当時マラッカにはこの力を結集できる人はいなかった。マラッカは内部から分裂したのであった。新総理大臣 Paduka Raja とサルタン Mahmud Syah は政府の最高指導者としてこれを修復する能力がなかったのであった。

行政上の問題で総理大臣とサルタンの地位は決定する役割を担うものである。この総理大臣の職責が強い人の手中にあるときには一般的に強力な政治を行えるものである。敵対グループは自己利益のために時の政府に面従腹背していたとしてもこういう時には反動することを好まないものである。しかし、総理大臣が弱い人の手中に落ちた時政治は乱れてしまう。被征服諸国は自分たちを支配から解放して独立国を形成する機会を得るのである。〈211〉中央政府に対する尊敬の念は既に消えてしまった。反対のみならず支持するグループの強さが競争を生み出した。国内の平和と繁栄が脅かされたのであった。

マラッカは国際商業都市であった。国際商業都市で生きているのは商魂である。マラッカのすべての力はマラッカ港市に集中されていた。望むと望まざるにかかわらず、この商魂はマラッカの人たちの生活に命を与えた。そのすべてが利益損失で計算されていたのであった。マラッカ国の発展初期において、マラッカを国際交易と国際政治の分野で重要な地位に押し上げたサルタン Paramesawara に育てられその後 Tun Perak に引き継がれた闘争精神は商魂によって徐々に後ろに押し込められたのであった。マラッカ国の繁栄は少しずつ闘争精神を弱体化させた。マラッカ外にある目標の喪失のゆえにマラッカの勢力がグループ内とグループ相互のつぶし合いで粉砕されてしまったのであった。目標喪失に伴う闘争精神の欠如は最終的に自分の勢力を破滅させ、外部からの危機に対処するために重要である一体化を粉々にしたのであった。マラッカはもう闘争する都市ではなく商業都市になってしまったのであった。軍隊精神が衰え商魂に代わってしまった。軍事訓練は利益追求の訓練に置き換わってしまったのであった。